

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	業務マニュアルを全ての職員に配布し、年1回見直しを行っている。組織の理念を目の届くところに掲げ、意識できるようにしている。年1回の5つの花びらの理念研修を行い、共有、実践を行っている。毎月、ひとときケア会議、または5つの花びらに沿ったケア会議を行い、継続的に理念を共有できるようにしている。	理念については玄関正面、各ユニットの目に付きやすい所に掲示し共有と実践に努めている。毎月5つの花びらの理念を基に研修を行い「自分らしさ、共にある、結びつき、たずさわりのくつろぎ」という想いの理解に繋げ、支援の向上にも繋げている。また、新入職員と、転入職員に対しては入職時に行う研修の中で理解を深めるように取り組んでいる。家族に対しては入居時に、理念に沿った支援について説明している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	自治会に加入。コロナ禍において、小学校や中学校、地域との交流が難しくなっている部分もある。保育園とは、窓越しの交流会や遠くから焼き芋大会や運動会への参加など、模索しながらの交流ができた。	開設以来自治会費を納め地域の一員として活動している。新型コロナ禍が続き、地域行事の自粛も続き残念な状況となっている。そのような中、地区の保育園との交流活動が続けられ園児が来訪し窓越しで歌や踊りを披露し楽しいひと時を過ごし、焼き芋大会や運動会にも招待をいただいている。また、利用者が製作した「手作り雑巾」や「手作りキーホルダー」等のプレゼントを管理者が保育園を訪問し届けている。また、当ホームの防災訓練の際に行われる「AED」の研修会の際には地域の方も数名参加している。合わせて認知症、介護保険の相談で来訪される方もおり、地域に密着した複合施設になりつつあることが感じられた。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	入居希望の方だけでなく、地域で日々の介護に困っている方の電話や来訪相談が増え、ご家族の気持ちに寄り添いながら、介護保険や様々な様々なサービスについて説明している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナ禍ではあるが、流行状況に応じて、資料配布での開催や、少人数の参加に変更し開催している。資料配布の開催では伝わり切れない部分もあり、余程蔓延している時以外は、対策を十分にいき、会議を開催し、議事録は掲示板に貼り公表し、職員は回覧にて情報共有を図っている。	新型コロナ禍が続き書面での会議が続いていたが、今年度は対面での会議を開催している。2ヶ月に1回行い、区長、区長代理、民生委員2名、市介護保険課、介護相談員2名、ホーム関係者の出席で開催している。家族代表については新型コロナ禍のため書面で報告している。活動状況報告、身体拘束適正化委員会、事故ヒヤリハット報告などを行い、意見・要望を聞き、お便り「みのり通信」を見ながら意見交換も行きサービスの向上に繋げている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者とは日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議の場を通じ取り組んでいる。また、事故発生時の報告を速やかに行ない、情報の共有や再発防止に向けた協力関係を築いている。	市介護福祉課には新型コロナの感染対策、事故報告等、運営推進会議開催時に報告・相談している。介護認定更新調査は調査員が来訪して行われ現在は新型コロナ禍でもあり、家族の同席は自粛し職員が対応している。介護相談員の来訪も新型コロナのため自粛状況が続いているが収束後の再開を待ち望んでいる。	

八幡グループホームみのり

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護保険法指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	ケアについてユニット会議で検証。入社時及び、定期研修を通じ周知している。玄関は、自動開閉ができない構造であるため、職員が都度付き添い玄関の出入りをお手伝いしている。	法人の方針として拘束のない支援に取り組んでいる。玄関は安全確保のため施錠されている。外出傾向の強い方がおり職員が付き添い外を散歩している。転倒・転落危惧のある利用者があり、家族と相談の上センサーマットを使用している方が半数弱、低床ベット利用の方が若干名いる。6ヶ月に1回開かれる身体拘束適正化委員会と年2回事例を上げ行われる身体拘束の研修会で拘束に対する知識を高め支援に取り組んでいる。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	年2回、虐待防止研修を行い、3ヶ月に1回ケア会議で不適切ケアアンケートを実施し、小さな不適切ケアの段階で虐待の芽を摘める環境を整えている。また、小さなヒヤリハットでも声にしやすいう、ヒヤリハット報告書の様式を変更した。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	入居時支援している。また、管理者は研修参加を通じ成年後見制度の理解を深めている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約は入居前面談で、十分な説明を行い理解を得ている。制度改正時には重要事項説明書を交付し、承諾を頂いている。家族との日頃の関係構築を大切にし、またケアプランの見直し時は、家族にも同席して頂き、同意を得ている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	玄関に意見箱を設置。コロナ禍の為、家族会の実施はできないのが現状。面会も窓越し面会・オンライン面会となり、家族が来所される機会も減っている為、管理者は意識して連絡する機会を増やし連携を図っている年1回、本社より満足度アンケート調査を匿名にて実施し、意見や要望を運営に活かしている。	家族の面会については窓越し面会を基本とし、新型コロナウイルス感性レベルの状況を見て、気候の良い時期には外で10分～15分位の対面での面会を行い、家族との関係が途切れないよう工夫している。また、ホームでの生活の様子は毎月発行されるお便り「みのり通信」でもお知らせし、利用者一人ひとりの様子は管理者が毎月個別の手紙に写真を添えてお届けし家族より好評をいただいている。新型コロナウイルス前は年1回、秋に収穫祭を行い家族と焼き肉大会を楽しんだりしていたが、今年度も中止となり残念であるが収束後は再開する予定がある。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	利用者のつぶやきなども介護日誌に記入。棟会議、リーダー会議、拠点長会議、幹部参加によるライフサポート会議など提案を聞き業務に反映させている。毎月ユニット会議、リーダー会議を実施し、職員の意見反映に努めている。また、職員が自主的に考え動きやすいよう、職員が管理者と話しやすい環境作りを行っている。	月1回、ユニット会議を行い、利用者に対し5つの花びらに沿った介護が出来ているかどうかの確認をすると共に、ひもとき解きシートを用い利用者の想いを探っている。合わせて職員同士のコミュニケーションを図る場としてユニット会議を役立てている。また、出退勤時に事務所で悩みごとの話をしている。人事考課制度があり年2回、段階毎のキャリアに従い自己評価を行い、管理者による個人面談も行われ評価とともにモチベーションアップに繋げている。	

八幡グループホームみのり

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	人事考課制度があり、各スタッフは、自己評価後、1次評価者、2次評価者と面談を行う。また、キャリアパスにより各々がレベルに応じたスキルアップが出来るような環境を整えている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	年間研修計画に応じ、毎月事業所内で全体研修を実施している。本社の施設部門全体では、外部講師を招いた研修を月1回開催。自主的に参加する職員も増えている。 月1回のケア会議を開催し実際の現場を通して学びを得ると共に、キャリアパス計画に沿って、現場が一番の学びの場である事を管理者が意識し、それぞれの職員の力量をみながら、指導・助言を行っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナ禍でオンラインになってしまう事もあるが、千曲市介護保険事業所連絡会、施設部会に参加し、コロナ禍の各施設の対応や情報交換を行っている。また合同研修会や事例検討を通じ、資質向上に努めている。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前に自宅等事前訪問を行い、本人の身体状況やニーズを把握。センター方式シートを用い、本人の世界観を考えながら支援を行い、本人の言葉に耳を傾け、入居後の本人の言葉や行動を見ながら、申し送りやケア会議で支援の方向を職員みんなで考えている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居相談の段階から、ご家族の思いにしっかり耳を傾け、相談しやすい関係づくりを大切にしている。事前訪問時には、家族と本人の今までの暮らし、関係性、家族の意向や要望の確認も行っている。入居後1～2ヶ月は、家族に安心してもらえるようこまめに連絡をとるよう心掛けている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	施設ケアマネが入居前より、個別相談受付を行なう。適切な施設紹介や在宅ケアマネジャーとの連携を図っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	5つの花びらの理念のもと、本人の出来る能力・本人のニーズを大切にしながら、職員と利用者が互いに支え合い、信頼関係を構築し、利用者・職員が共にいきがい・やりがいを感じる事ができるホーム作りを行っている。		

八幡グループホームみのり

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	入居前面談、更新時面談等により、家族の意向・役割を確認しながら、ケアプランに家族の役割を位置づけている。日頃から、利用者の状況を家族と共有し、支援の方針を確認しながら関係を築いている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍で家族との外出など制限はあるが、窓越し面会だけでなく、手紙や電話・差し入れなど、家族や知人とのつながりが途切れないように支援している。平日の空いている時を見計らい、地域への外出支援もしている。	本人が不安になった時には家族に電話をして話をさせていただき気持ちを落ち着かせるように努めている。携帯電話をお持ちの方が若干居られる。また、友人、知人の来訪があるが家族に連絡の上、窓越し面会や気候の良い時期には外であっていただいている。おやつ、靴下、日用品等希望の物は家族に連絡の上職員が購入しお渡ししている。引き続き年末には手作り年賀状を家族に発送する予定を立てている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	日常的に利用者同士、洗濯量、衣類の修繕、下膳など出来る人が出来ない人をサポートしている。職員は関係を築きやすい座席に工夫したり、仲介をするなど関係構築に努めている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	必要に応じ関係機関と連携をとりながら、継続した支援が出来るよう、情報の提供をおこなっている。ご家族からの連絡、野菜類のお届けなどいまだに終了後のご家族来訪が続いている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者の生活歴の把握を行い、本人本位の希望や意向の把握に努め、どうすれば実現するかの視点で考え支援に反映。入所前訪問ではアルバム等を作成し、スタッフで共有している。日常的に本人の選択の場面を多く持つ。	殆どの利用者は自分の意向を伝えられる状況で、言葉に合わせた行動や表情より希望を受け止め、洋服選び、飲み物やおやつ選び等、幾つか提案して希望に沿えるよう取り組んでいる。また、職員同士声を掛け合い情報を共有し、大事な事柄は申し送りノートに残し、出勤時に目を通し日々の業務に入るようにしている。また、利用者に対しその都度「ありがとう」の言葉がけをし、気持ち良く過ごしていただけるようにしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所前の生活を事前訪問により把握し、介護スタッフにわかるように情報を共有。入居後も、かぞくとの会話の中で新たに知りえた情報を記録し職員間で共有。なじみの暮らし、こだわりを大切にしながら、穏やかな時間が継続できるようにしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	朝夕のミーティング時間で、情報を共有。なじみの生活に近づけるような過ごし方をアセスメントしている。		

八幡グループホームみのり

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	毎月、計画作成担当者が出力したモニタリング表を全スタッフに回覧、追記。棟会議、ケア会議、担当者会議を通じ計画作成に反映させている。定期的にケアプランを見直し、家族を招き担当者会議を開催している。	職員全員で利用者一人ひとりを把握するよう心掛け、毎月回覧されるモニタリング表を用い、ケア会議の席上、意見を出し合いプラン作成に繋げている。管理者やケアマネージャーによる担当者会議では家族の意向をプラン作成に取り入れている。入居時には自宅での生活環境を参考に、暫定で、2~3ヶ月のプラン作成を行い様子を見て、通常は6ヶ月でのプランで、更に、状態が安定している場合は1年での見直しとしている。状態に変化が見られた時には随時の見直しを行い、一人ひとりに合った支援に取り組んでいる。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日常生活支援シート 介護記録 モニタリングを個別に記録し、毎日の引継ぎや棟会議に活かし情報共有に努めている。記録研修も行い、伝わりやすい記録を実践できるようにしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	検討を重ねながら、出来る体制の中でその日の状態や状況に応じた柔軟な支援をしている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域資源は回覧板等により把握。コロナ禍の為イベントへの酸化は難しいが、花見や寺院巡りなど、利用者と共に出掛け楽しんでいる。区長さんが地区の会報をこまめに届けてくれる。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	契約時、ご家族へ説明を行い、入所後のかかりつけ医、医療機関を選択していただけるよう配慮している。協力医による往診を月1回受け、適切な医療が受けられるよう支援している。必要時には関連施設に電話相談を行い、状況により看護師が来訪。訪問歯科も適宜調整している。	入居時に医療機関についての希望を聞き、ホームとしての取り組みについて説明している。現在はホーム協力医の月1回の往診利用の方が大半で、受診対応の方と入居前からのかかりつけ医利用の方がそれぞれ若干名ずつという状況である。また、隣接の地域密着型入居者生活介護特定施設の看護師との連携が図られている。歯科については協力歯科の医師と歯科衛生士の来訪がそれぞれ月2回あり、口の健康保持にも取り組んでいる	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師の常駐は現在はない。系列施設からの応援体制。介護記録の確認や、電話での連絡調整を行ない、連携を図っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	病院カンファレンスへの参加を行い、情報交換や関係作りを努めている。退院時はサマリーを各スタッフが確認する体制がある。		

八幡グループホームみのり

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることができることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	関連施設からの看護師の応援体制があるが24時間対応はしておらず、また常時看護師がいないため、看取りに関しては家族と慎重に話し合いを重ね、住み替えや看取りの方針等を決めている。 予測不可能な事態が起きた場合には病院ケースワーカー、担当医、ケアマネ等を含め合同カンファレンスにて検討している。	重度化、終末期に対する指針があり、利用契約時に説明し家族の意向を確認し、6ヶ月に1回のケアプラン更新時にも家族の意向を確認している。食事や入浴が難しい状況に到り終末期を迎えた時には家族、主治医、ホームで話し合い、家族の意向を確認の上、主治医の指示の下、ホームとして出来る精一杯の支援に取り組んでいる。この1年以内に3名の方の看取りを行い新型コロナウイルス禍の中ではあるが家族には感染対策を取った上で居室にて最期の時を共にしていただき感謝の言葉を頂いている。看取り後には1ヶ月位してから振り返りの時を持ち、次回に繋げるようにしている。また、年2回管理者が講師となり看取り研修会を行い、心構え等を学んでいる。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	年1回応急処置や事故対応、感染症対策の研修を実施している。AEDを設置している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回防災訓練を地域住民も含め行っている。見守りを含めた協力、施設を避難所として開放する等現在も運営推進会議の場を通じ議論している。今年度は地震想定訓練も実施した。AED使用の協力要請があり、地域でも使えるようにしている。	年2回防災訓練を行っている。春には隣接施設と合同で消防署、区長、民生委員、介護相談員の参加の下、水消火器を用い火災想定での消火訓練を行い、通報訓練、利用者全員駐車場まで移動しての避難訓練も行っている。秋には回覧板で訓練実施案内を地域に回して頂き、運営推進会議メンバー参加の下、AEDの使い方の実地訓練、通報訓練、避難訓練などを行い、地域住民の方が7～8名参加されたという。備蓄は消費期限5年の「保存食料」「水」「ペットボトル」等が準備されている。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	個人情報等の覚書を交わしている。研修を年1回行っている。また、常に人生の先輩として意識し、自尊心を傷つけないような言葉を選んだり、本人の世界観を大切にケアの方法を考え実践している。	共同生活の中で丁寧の中にも親しみのある言葉遣いに心掛けています。また、一人ひとりの言葉の裏にあるものを汲み取り、気持ち良く生活していただくよう努めている。また、利用者の前では他の利用者の話はしないよう徹底し、緊急で必要な時には居室番号で話をするようにしている。呼び掛けは一人ひとりの希望により苗字、名前を「さん」付けでお呼びしている。また、入室の際には「ノック」と「トントン」と声掛けするよう徹底している。年1回人権擁護の研修会を行い意識を高め支援に取り組んでいる。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	活動の選択や出来る活動の参加など本人の意思を尊重した働きかけを行っている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	利用者本位のホーム作りが出来るよう、職員間であまり細かい時間割りは作らず、利用者様と共に生活できることを大切に支援している。		

八幡グループホームみのり

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	起床時出来る方は、ご自身で整容している。出来ない方は、備品等を手渡し実施。訪問美容ではパーマーやカラーを楽しんだり、化粧やおしゃれを通じ自分を表現していただけるように支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	毎食一緒に食材を切ったり、立位が困難な利用者はIH卓上コンロを使い調理をしたり、下膳、食器洗い・食器拭き等それぞれがその日にやりたいことに携わっている。行事食等も行い、飲食用の水は水素水を使用。粥、刻み、ミキサー食にも対応。誕生会にはご本人に主体的に献立作成にかかわって頂く。	殆どの利用者は自力で常食を摂ることができ、若干名の方が全介助という状況である。献立は管理者が立てた1年分の献立を季節に合わせてアレンジし調理している。利用者と一緒に調理することを意識し野菜を多く使い、旬の物を多く取り入れるよう心掛けている。誕生日には本人の希望を取り入れたものを準備し、「ノンアルコールビール」を楽しめる方もいる。また、敬老会時には「紅白饅頭」を一緒に作り、行事の際には「おはぎ」を作り味わっている。更に、テイクアウトで「お寿司」を取り寄せたり、週1回はお弁当の日を計画している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	健康チェックを行いながら、薬に依存しない対策を検討し、トータル水分量を把握し、盛り付け量なども個別に定めている。状態に応じトロミ剤、ミキサー食等を提供。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後実施。口腔ケアグッズは毎日洗浄、消毒を行い清潔な物を使用。個別に仕上げ磨きを支援し、予防歯科にも力を入れている。また、訪問歯科検診なども実施し、助言を受けている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	安易に布パンツからオムツの使用に変更せず、本人が布パンツでの生活が継続できるようその人に合わせて考えて支援している。オムツの使用量をチェックし、またご本人の排泄のサインをキャッチし、一人一人のパターンを把握。使用枚数削減に努めている。これまでの習慣も含め、個別の排泄マニュアルを作成。スムーズなトイレ誘導、排泄の自立に取り組んでいる。	見守りで自立されている方が半数強、一部介助の方が半数弱で全員トイレでの排泄を心掛けている。職員は利用者一人ひとりのパターンを把握しており、排泄記録も参考に個々の様子を見て声がけ、見守りを行うようにしている。排便促進については3～4日無い場合はコントロールを行い、オリゴ糖、お茶、牛乳、ジュース等で1日1,400cc～1,500ccの水分摂取に取り組み、スムーズな排便に繋げている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	安易に下剤を使用せず、水分量の把握や散歩、ストレッチ体操、豆乳、オリゴ糖などを積極的に取り入れている。、自然の力を活かした便秘予防に努めている。また、献立に多くの野菜を入れるよう工夫している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	一人一人湯を入れ替え、温泉の入浴剤を選択、菖蒲湯など季節に合わせた湯を提供し、好評をいただいている。曜日や時間帯はケアプランにより、位置付けているが、気分や体調を把握し、柔軟に対応している。足湯など個別の対応も柔軟に行っている。	週2回入浴を行っているが、全利用者が何らかの介助を必要としている。入浴拒否の方がいるが日を変えたり、無理強いせず、声掛け方に工夫をして入浴していただくようにしている。また、週2回位は洗面器を使い足湯も楽しんでいる。入浴剤を使用したり、「リンゴ湯」「梨湯」「菖蒲湯」「ゆず湯」等の季節のお風呂も楽しんでいる。	

八幡グループホームみのり

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	音楽をかけたり、なじみのぬいぐるみを置いたり、寄り添ったり、好みの室温、照明に調整するなど支援している。必要に応じ眠りスクラン導入による、睡眠アセスメントを実施。生活リズムの見直し、改善に活かしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	処方内容一覧を全職員が常時見れる場所に置き、変更時には情報を速やかに差し替える。利用者の疾病に関しては、症状や今後の経過などを印刷し、疾病への理解を深め、支援している。各々の利用者に応じた服薬方法を取り、変化を職員間で共有。服薬は2名セットでチェックを行い服薬ミスを防いでいる。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	センター方式シートを用い、新たに本人の嗜好や生活歴を知った時は、追記し共有している。認知症を患っていても少しの支援があれば今まで楽しんできた生活・役割や生きがいを持った生活が送れるように支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍ではあるが、平日の空いている時間に買い物や公園等に外出、菊花展やお花見、紅葉狩りなど、季節を感じられる外出支援も大切にしている。ゴミ捨てや草取り、洗濯干し、散歩、外での昼食やお茶会など日常の中でも戸外に出られる機会を設けている。	外出時、殆どの利用者は行くときは自力で歩かれるが帰りは車いす使用の方という状況になっている。天気の良い日にはホームの周りを散歩したり畑で夏野菜の栽培や草取りを楽しんでいる。合わせて日課として交代でゴミステーションまでゴミ出しに出掛けている。また、近くの小学校で「豚」を飼育しているので成長具合を楽しみに見学に出掛けている。更に、天気に合わせ駐車場でお弁当を食べたり、人出の少ない平日に近くの公園にお弁当を持ちドライブを兼ね外出している。今後、新型コロナウイルスレベル見ながら外出活動を行う予定であるという。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	ご家族・本人と話し合いの上、少額の買い物代行や少額の金銭預かりも行っている。コロナ禍だが、小さな商店に欲しい物を一緒に買いに行く喜びも感じてもらえるようにしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人の希望時は共に家族や知人に電話をしたり、家族からもいつでもかけて貰えるようにしている。コロナ禍という事もあり、オンライン電話も取り入れた。年賀状や暑中見舞いだけでなく、日頃から家族と文通を重ね、職員とポストに手紙を入れにいっ楽しむなども感じてもらえるように支援している。また、携帯電話を持参している利用者もいる。		

八幡グループホームみのり

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	自然の光や温かさ、風を感じて頂けるようにし、日中夜空調、湿度管理を行っている。台所なども十分なスペースを確保し、家具なども家庭的な雰囲気の物を用いている。花等を飾り季節感を取り入れている。作品等をホールや居室に展示し作る度に入れ替え、生活観季節感も大切にしている。	広い駐車場の脇には家庭菜園用の畑が準備されている。玄関を入ると「5つの花びら」の理念と地域の小学生から送られた作品が飾られている。広々とした共用部分は陽当たりが良く開放感が漂っている。室内は利用者、職員手作りの飾り付けが施され、訪問時は「紅葉」が飾られ季節感が感じられた。また、壁には利用者の作品が貼られていた。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ソファや食堂の席を配慮し、相性の良い仲間と交流できるようにしている。本人の意向を聞きながら希望を取り入れたり、個々の動線に応じ手すりを設置するなど住環境にも工夫を凝らし支援を行っている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	使い慣れたなじみの家具や調度品、写真等思い思いに持ち込まれている。家具や布団はなじみの物を持参していただいている。動きやすい動線への配慮をしている。	整理整頓が行き届いた居室には大きなクローゼットが備え付けられ暮らし易い造りとなっている。持ち込みは家族と相談の上、使い慣れた家具、調度品等が持ち込まれ家族の写真や職員から贈られた誕生日、敬老会のお祝いカード等に囲まれ自由な日々を過ごしている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	センター方式を用い、出来る事、出来る可能性のある事を個別に把握。できる事まで支援しすぎないようにしている。環境を整えることで出来る事、やりたいことも楽しめるようになるため、必要に応じて積極的に福祉用具を取り入れている。また、事故原因の考察を行い、方針を決定し、考える過程を大切にしている。ヒヤリの時点で環境の改善に努め、安全に自立した生活が送れる様に配慮。		